職場実習：入所後５年経過し（34 歳）、情緒的に安定してきたため作業班と取引のある隣町の木工所へ 37 才の他の利用者と職場実習を実施。一週間の予定で作業指導員が同行する。丁寧でまじめな態度から実習を継続するようになる。しかし、園内での女性問題が生じ欠勤するようになり実習を中止。一年後（入所７年後）実習を再開。意欲的に仕事に取り組むようになり、就労を考える。
自活（生活）訓練：入所７年後、職場実習を再開した後、臨時雇用されたため、同じ企業に行く利用者と二人で施設から１km離れている一軒家を借り生活を始める。（グループホームが1995年に認可される３年前である）。
1995 年、新築のアパートに移りグループホームとして認可された。
同僚からの援助：　職場実習を中断したときに、一緒に行っていた寮生は継続しており、それが本人の目に見える具体的な目標となった。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 性的な問題に入所施設側で具体的に対応しながら、他の利用者と職場実習に入り自信をつけさせ、二人で一軒家（民家）で住む体験を経てグループホームへとつなげた。
２．環境調整の援助
(1) グループホームの認可の３年前から、無認可の民家で地域生活を開始しグループホームの認可につなげている。

事例Ⅱ－２
対象者：男性、64歳、IQ：60　在所年数７年
法人運営施設：
＊　入所更生施設２カ所、どちらも 50 人（重度 20 人）。（1980 年、1984 年）。
＊　グループホーム１カ所（1991 年）。

１．生活歴および生活能力
中学中退し父の左官業を手伝うが父死亡。その後、家出し大阪でルンペンをしているのを兄が連れ戻す。その兄も死亡し、姉宅で昼はパチンコなどをする生活をしていた。51 歳で施設入所。日常生活ではさほど支障がないが、周囲の状況を無視した唐突な行動が多い（接枝性分裂病）。
２．入所施設内での援助
生活指導：＊清潔、身だしなみについての指導（口臭がきついため入れ歯の手入れをすること、大便の始末など。）＊対人関係で自己中心的な行動（重度の人をカッとなって叩く、清掃などをしない等）を改善する。
作業指導：少人数の作業で、準備から後かたづけまで責任を持たせる。集団生活の中での効果が見られた。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所５年後、施設で受注していた木工所に職場実習。約２年間続ける。
自活（生活）訓練：特に記述なし
グループホーム入居とその後の経過：就労先を廃油処理会社に変更し、ドラム缶の移動を担当した。金銭管理の心配もあったが、無駄使いせず、ホーム内ではゴミ捨てや雨戸の開閉などを担当し対人関係も良い。
４．反省／今後の方向
(1) 「『ここにいるのは恥ずかしい、退所してどこかで働きたい』という本人の気持ちを受け止め、対応した環境に置くことを目標としたことがいい効果を示した。全てが平均以上でないと地域生活はできないという考え方にこだわらなかった、ことが良い結果となった。」。また、地域生活は「高齢だからとあきらめる必要はない」という意見を述べている。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 地域で仕事をしていた経験から本人の自立への希望があり、それにそって、身だしなみ、清潔、対人関係を施設内の生活指導で行い、職場実習へつないだ。
２．環境調整の援助
(1) 64 才の高齢であるが本人の強い意向を尊重した。

事例Ⅱ－３
対象者：男性、25歳、IQ：60　在所年数７年
法人運営施設：
＊　入所更生施設 50 人（通所 15 人）（1979 年）。
＊　グループホーム２カ所（1989 年、1992 年）

１．生活歴および生活能力
養護学校高等部卒業後、18 歳で家庭より施設入所。会話は日常生活に支障がない。体力がなく、小さな事を気にしすぎる。
２．入所施設内での援助
生活指導：体力をつける（ジョギング）。実習先で金銭の貸し借りのトラブルもあり、本人も無駄遣いの傾向が強いため担当職員を中心に指導する。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：①入所後10ヶ月、「このまま園内作業を続けても慣れと節度のなさが身に付きそうとの懸念もあり」縫製工場へ実習に。②入所後２年５ヶ月（20歳）、運送会社に実習。体力が徐々につく。③入所後６年、水産加工会社で実習。１年３ヶ月で就職。
自活（生活）訓練：１年６ヶ月で施設の近くにある「訓練棟」で自活（生活）訓練を実施。
４．反省／今後の方向
「実習期間がのべ６年間にも及び、もっと早くに就職できたと思えるが、本人がいろいろな場面に直面したときの対応を学ぶことが出来たと思う」。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 高等部を卒業し入所した青年に対し、施設への慣れを警戒し、早期に職場実習へ出し地域移行を目標とした。同時に体力をつける、金の無駄遣いをしない等の具体的な援助を実施。
２．環境調整の援助
入所後 10 ヶ月で職場実習を導入、１年６ヶ月で自活（生活）訓練を開始と本人を中心とした援助の態勢を作る。

事例Ⅱ－４
対象者：男性、27歳、IQ：47　在所年数８年（その他児童施設で 14 年）
法人運営施設：
＊　入所更生施設（入所 57 人、通所 15 人）。
＊　グループホーム２カ所（1995 年）。
法人はこの他に、児童入所施設 50 人（1965 年）を運営している。

１．生活歴および生活能力
６才児童施設入所。成人施設へ移行。身辺自立、日常会話は問題ない。性格は明るいが短気で、失敗を他人のせいにすることが多い。
２．入所施設内（19歳以降）での援助
生活指導・作業指導：細かなことで物にあたる。本人が整理できるまで、話し合いをする。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：成人施設入所４年目、合板製造会社へ職場実習。
自活（生活）訓練：７年目、実習棟で１年間の生活実習。小遣いの使い方、小遣い帳の記入などを学習。自分の感情をコントロールでき興奮することも少なく、身辺も整理できるようになった。これには、グループホームのことが具体的になり、近い目標としてはっきりしてきたことが大きいと思う。
グループホーム入居とその後の経過：
同居人とも上手に強調しながら自分の好きなことをして生活を楽しんでいる。次の目標は一人暮らしである、と言っている。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．環境調整の援助

(1) 「グループホームができたことが、本人の意欲につながり、社会自立への近道となった」と述べているように６才からの入所施設生活からグループホームができることによって移行できた事例である。

事例Ⅱ－５
対象者：女性、30歳、IQ：49　在所年数８年
法人運営施設：
＊　入所更生施設 70 人（1983 年）。
＊　グループホーム１カ所（1996 年）。
法人は、その他、入所更生施設２カ所（160 人、50 人）、重症心身障害児施設（50 人）、児童入所施設（30 人）グループホーム４カ所（1991 年、1992 年、1993 年、1995 年）を運営。

１．生活歴および生活能力
生後２年で乳児院、10 才より児童施設に入所。高等部を卒業し 18 歳入所。肉親とのふれあいはほとんどない。２才より施設生活で、穏和で目立たない性格のため集団の流れについていくことが多く、自分の要求を言わない。身辺処理は出来る。言葉の理解力もあるが、伝えることが難しくオウム返しが多い。
２．入所施設内での援助
生活・作業指導：施設になれることと自分から話しかけれるように援助。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：①　入所後３年、職員の送迎による職場実習（９時半～３時）。職場での対人関係に問題が生じたが、仕事に自信がつくに従って自分から話しかけたり出来るようになる。職場実習開始２年後、職場実習の実働時間を通常の８時～５時にする。調理も献立ごとに分けることをやめ本人が自分で選ぶようにする。職場実習終了後、バスが来るまでの時間を利用して、八百屋で食事の材料を購入する。（キャベツとレタス、ジャガイモと里芋、卵２個を２パックに間違えたりした）
自活（生活）訓練：入所後４年(23才)、職員住宅を利用した自活（生活）訓練（午後５時半～午後９時まで)。職員が、献立、材料を購入、レシピー作成、遅出職員１名が調理訓練と余暇指導を行う。自活（生活）訓練開始２年後、自活（生活）訓練の時間を終日とし、各自の家具、布団を入れ、朝食も作って出勤する状況に変更。外出できるように電車の乗り方、切符の買い方を指導。最初は職員が同伴し、徐々に一人で出来るようにする。献立、調理、片づけが本人達で出来るようになる。入所後１年（28歳)、一軒家を借り、就労しグループホームで世話人と生活を開始する
グループホーム入居とその後の経過：
「地域社会の中でより豊かな生活を始め、仕事への意欲も出ている。『集団生活から今初めて経験する個の喜び』を得られている。・・・施設の中でしか見えなかった事柄が（グループホームに出て）見られるようになり、手にするもの、耳にするもの、見えるものすべてが新鮮で、いろいろなことができる自分を自覚できたことと思われる」と述べている。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) ２才から 22 才まで施設にいた人が、施設内で自分の要求をいうように援助を受け、６年の間に職場実習、自活（生活）訓練とも徐々に時間をのばして地域で生活できる状況に近づけている。
２．環境調整の援助
(1) 自活（生活）訓練で、調理、余暇指導を行う遅出職員１名を配置。休日を利用して職員が電車の乗り方等を細かく指導している。
(2) 施設の運営主体（県事業団）は 1991 年より４カ所のグループホームを運営しており、これらのホームからくる情報も本人の地域移行への意欲にいい影響を与えたと思われる。

事例Ⅱ－６
対象者：女性、52歳、IQ：42　在所年数８年（44歳～52歳）
法人運営施設：
＊　入所更生施設 50 人(1989 年)、通所更生施設 30 人(1996 年)。
＊　県の単独補助によるグループホーム２カ所（1995 年、1997 年)。

1．生活歴および生活能力

小、中学校（普通学級）を卒業し在宅。24才で結婚するが、１年７ヶ月で離婚。そのまま在宅。44歳で施設入所。

2．入所施設内での援助

生活指導：対人関係では、一人の人とのみ親しくし、他の入所者には自分から関係を持とうとしなかったりいじめたりする、虚言、作り話、告げ口がある。自分の不注意から怪我や風邪を引くことが多いなどの問題があった。

作業指導：園内の厨房作業などをしながら、自分のことに目を向け、健康も自分で管理するように指導したが、それほど効果がなかった。

3．グループホーム入居に向けての援助

職場実習：５年目（48歳）までは、施設内作業が多く、本人に適した実習先が見つからなかった。49才、リサイクルセンターでの園外実習。生活圏が拡大し、特定の人だけではない対人関係の広がりが見られたが、虚言等の問題は続き、怪我も多発した。実習先を正式雇用の可能性の高いクリーニング店に変えるが、仕事がこなせないために中止。再びリサイクルセンターでの実習に戻る。実習の送迎は学園で行っていたが、帰りのみ公共のバスを利用するようにする。月４千円の小遣いの自己管理させ、小遣い帳のつけ方の指導を行う。休日にバスで市内の外出指導を行う。自信がつき、勤労意欲や自立への意欲が高まるにつれ、虚言、作り話、告げ口や甘えるような訴え、体調不良が減少してきた。実習先をＤ社に変更。３ヶ月して雇用可能との連絡があった。

自活（生活）訓練：入所後７年目。母親が自宅への引き取りに難を示したため、グループホームができた時点で就労するという方向を定めた。グループホーム入居の候補者４人が同じ居室に移り準備を始める。日用品の共同管理、自販機のジュースや薬の自己管理を行う。

4．反省／今後の方向

入所当時には本人はもちろん､援助を行う側もグループホームの制度に対する知識が不足していた。もっと早い時点で目標をグループホームに求めていればより的確な判断で援助ができたと思われる。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件

1．本人への援助

(1) 「施設内の限られた人間関係に固執していた問題が、園外実習に参加し施設外の人々との関わりを持つことにより軽減した。」と述べているように、実習や自活（生活）訓練を重ねる中で、地域生活への移行という目標ができ、それによって就労意欲の啓発、生活圏の拡大が見られ、いろいろな人とのふれあいの中で人間的に成長し、いじめや陰口の問題が軽減してきた。

2．環境調整の援助

(1) 平成７年に法人の施設で男性のグループホームができ、その後女性のグループホームを作る方向で進められた。

事例Ⅱ－７

対象者：男性、42歳、IQ：38（会話は普通）　在所年数９年

法人運営施設：

＊　入所更生施設 110 人（1967 年）。

＊　グループホーム２カ所（1989 年、1994 年）。

　　法人は他に児童入所施設 90 人（重度 40 人）（1958 年）を運営。

1．生活歴および生活能力

15 才～ 19 才知的障害児施設入所。23 才会社就職。会社が倒産し放浪寸前に 33 歳で成人施設へ保護入所。身辺処理、会話には支障がないが言動が粗暴で、弱い人に命令口調になる。

2．入所施設内での援助

生活指導：自分より弱い人へ粗暴、無理に指示に従わせるなどが見られ、極力職員と話し合いを持つようにした。

作業指導：作業班の班長になってもらい責任を持つようになり、職員がいなくても自分に与えられた仕事に真面目に取り組むようになった。

３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習・自活（生活）訓練：入所４年後、職場実習に出る。評価も高くなり、責任を持ってことにあたるようになったため、６ケ月の自活（生活）訓練をする（入所８年後）。自活（生活）訓練の内容は部屋の管理、洗濯・調理・礼儀作法、余暇、金銭管理などで、金銭出納帳をつけることで金銭管理ができるようになった、実習先の問題の話し合い、職場指導、休みに買い物や遊びに行くことの相談などの援助が行われた。
グループホーム入居とその後の経過：
グループホーム入居者の内三名が同じ会社で働いており、話し合いをしたり、職場訪問を多くしている。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 自分より弱い人に対して無理に従わせるなどの人間関係が施設内指導、職場実習、自活（生活）訓練棟で改善し、就職してグループホームへ移行。
２．環境調整の援助
(1) 就職した会社には先輩が２名おり、その援助も大きかった。
(2) 就職に対する職場の援助が得られた。

事例Ⅱ－８
対象者：女性、33歳、IQ：52　在所年数９年
法人運営施設：
＊　入所更生施設 50 人（1983 年）。
＊　グループホーム１カ所（1992 年）。

１．生活歴および生活能力
普通の小、中学校を卒業し、５年間親の家で家事手伝い。身辺処理はほぼ自立。会話は話しかけて、一言二言かえってくる程度。ニコニコして表情は明るい。
２．入所施設内での援助
開所と同時に 30 歳で入所。友達になれて会話が出来るようにし、就労意欲、自立意欲を高め地域移行への目標を立てた。
施設内生活・作業指導：施設での行事参加ができなかったり、ホールでも遠くからテレビを見ていたりしたが、他の入所者や職員の働きかけで徐々に集団になれ、得意な手芸による家族への帽子作りなどもホールでできるようになった。一語文だけでの表現から、はっきりと会話ができるようになった。入所後５年位から、社会復帰を目指した援助としては、(1)「買い物」訓練の中で、路線バスの利用、単独での買い物、食堂で自分で注文、小遣い帳の記入　(2)美容院の利用　(3) 空き缶収集班に参加　(4) 帰省時に自宅での調理 を行った。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：７年後（27歳）、職業的性検査を受け、２週間の実習。その後、勤務が良好で実習期間を延長し、さらに正社員となる。
自活（生活）訓練：施設内別棟でグループホーム利用予定者４名が２ヶ月間実施。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 施設内で、友達と会話ができるように対人関係を広げ、買い物、食事、美容院などの広がりを施設で体験し、就労、グループホームへと地域生活へ移行した。
２．環境調整の援助
(1) グループホームを新設するに当たり、自活（生活）訓練棟が４人一緒に行えたこと。
(2) 職場実習先の企業が障害者雇用企業で担当者や社員の理解があった。

Ⅲ．入所更生施設からグループホームへの移行

（入所期間11年以上の場合）

事例Ⅲ－１
対象者：女性、36歳、IQ：46　在所年数11年
法人運営施設：
＊　入所更生施設（入所 70 人、通所５人）（1965 年）。
＊　グループホーム２カ所（1990 年、1994 年）。
その他、法人は児童入所施設 50 人（1963 年）、児童通園施設 30 人（1979 年）を運営している。

１．生活歴および生活能力
６歳より児童入所施設で生活。22 歳で施設入所。身辺処理は出来、言われた意味も分かるが、人間関係が上手でなく時に衝動的な行動が見られる。ゴミなどの収集癖がある。
２．入所施設内での援助
生活指導：（グループホームに向けての記述のみで、９年間の記録はない。）
作業指導：（グループホームに向けての記述のみで、９年間の記録はない。）
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所後９年、30歳で、すでにグループホーム入居者が働いている医院に他の利用者一名と職場実習に行く。本人はやる気だが、言われたことを自分流に解釈するためうまくいかないことがある。１人でのバス通勤を試みるが、目的地の駅で下車できるが、車道をふらりふらりと歩き危険なため中止。職場実習が始まってから持ち物の整理ができないなど生活に支障を来し、３ヶ月で一時職場実習を中止。約１年後職場実習を再開。グループホーム入居１ヶ月前に就職先のレストランへ職場実習を変わる。バスで通えるようになる。就労し、入所後11年（32歳）でグループホームへ入居。
自活（生活）訓練：グループホーム入居２ヶ月前に生活訓練棟へ移る。
グループホーム入居とその後の経過：32歳で施設より500m離れたグループホームへ入居。男子３名、女子２名。個室。
４．反省／今後の方向
グループホームに入ってから就労や生活についての問題が現れており、準備期間をもっと十分に取る必要があったと思われる。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) グループホームへの入居のために職場実習、自活（生活）訓練をしたが、長年の施設の生活習慣から抜けるのは難しい。しかし、本人の強いグループホームへの希望を聞き入れ、実施した。
２．環境調整の援助
(1) 「グループホーム入居者をうらやましく思い、自分が行きたいのに何故行けないのか不思議に思っている。」という記述があり、グループホームで同じ入所者が違う生活をしているのを見ること事態が利用者の地域移行への強い動機づけとなっている。

事例Ⅲ－２
対象者：女性、35歳、IQ：39　在所年数12年
法人運営施設：
＊　入所更生施設、入所 50 人、通所７人。（1980 年）。
＊　グループホーム１カ所（1994 年）。
＊　その他、通所授産施設 50 人（1993 年）を運営している。

１．生活歴および生活能力
８才で児童施設入所、19 歳で更生施設へ移行。会話、身辺処理には問題ないが、消極的な性格。ひらがなは読めるが、幼稚語で話し、依存的で人の言いなりになる。
２．入所施設内での援助
生活・作業指導：幼稚語に対しては会話の時に直したり、作文を書かせて正しい言葉を学習させる。ぼんやりしているときは指しゃぶりをしていたり、職員との関わりを多く持とうとし続けるため、部屋長や作業の班長などの役割を与え、責任を持つことを学ぶようにする。クラブ活動で踊り、大正琴

などに参加し、皆の前で発表させる。

3．グループホーム入居に向けての援助

自活（生活）訓練・職場実習：入所後10年（30歳）して、他入所者と２人で自立訓練棟での生活を体験し、そこから同法人の通所授産施設に通う。その後、養鶏所で職場実習を行う。洗濯や整理整頓はなんとかできるが、衣服などは古くなるとすぐ捨てたり、いつまでも同じ服を着たりする。31歳でグループホームに入居（入居者は男性２名、女性２名）。入居する時は自分の荷物をさっさとまとめ、自分の新しい部屋をいろいろと飾り、楽しむ。

グループホーム入居とその後の経過：

入居後、買い物学習に出かけるが金銭の理解は難しい。入居１年後、地域の一人暮らしの老人のところで家事見習いに出る。３ヶ月後に結婚。子どももでき家族で暮らしている。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件 **1．本人への援助** (1) 施設の生活援助、自立訓練等を通して、幼稚語や生活習慣の援助を行う。数の計算、読み書きは苦手で、グループホーム入居後も買い物指導を続ける。 **2．環境調整の援助** (1) 地域の民生委員の協力で、グループホームから町の人の家に家事見習いで住みこむ。グループホームには戻りたくない、とそのまま働いているうちに、民生委員の協力で結婚する。

事例Ⅲ－３

対象者：男性、39歳、IQ：記述なし　在所年数12年（21 歳～ 33 歳）
（その他児童施設に 11 年）

法人運営施設：

＊　入所更生施設 80 人（1975 年）。

＊　グループホーム２カ所（1992 年、1994 年）。

他に、児童入所施設 30 人（1968 年）を運営している。

1．生活歴および生活能力

10 歳より入所していた児童施設から 21 才に成人施設へ移行入所。施設経験が長く社会的経験の不足から対人関係に臆病なところ、反抗的な態度が見られるが、日常会話、身辺処理も問題なく将来的な展望を見つける必要を感じていた。

30歳になって（平成元年）、グループホームを目標とする。

2．入所施設内での援助

生活・作業指導：日常生活に特に支障はない。

3．グループホーム入居に向けての援助

職場実習：入所後10年（30歳）、合板会社に職場実習。作業能力には、問題ないが他者からの指示、注意の声かけに対し、叱られていると思いこみ、すねて動かなくなったり、帰園後、他の入所者にやつあたりする。会社側へ本人の対応、指示、声かけの仕方を考えていただき、職場訪問の回数も増やしどんな小さな事でもその場で解決する方法をとった。

自活（生活）訓練：グループホームの目処がつき、４名で自立訓練を始める。(1)週末の自主帰省で切符の買い方、乗降駅の把握を職員が引率して教える。(2) 非常時に施設に電話をかけれる練習をする。電話番号を紙に書き、その通りにかけるようにしたが難しく、自動的に施設にかかるテレフォンカード（応答ダイヤルカード）を利用した。(3) 次週分の朝食の献立を決めて材料を買いにいく買い物指導。小遣い帳をつけるようにしたが難しかった。

グループホーム入居とその後の経過：グループホーム入居後、病気で入院し退社。新しい事業所に就労するが再び罹病し退社。現在は施設の作業所に通所中である。

4．反省／今後の方向

地域移行後にいろいろな問題が起こり、これからもそれらの問題の起こることを予想して考える必要がある。長期施設入所者は地域で自立することに臆病であり、一つずつ目標を達成し自信につなげる必要がある。とかく、地域移行の場合には完全を追求しがちであるが、不完全なままに援助を受けながら自立の道を歩むことができることが事例を通してわかった。「就労していなければ社会自立は不可能」という観点が本人の将来展望を狭めていた。本事例の場合は、病気のために「就労」はできなくなったが、それでも地域で生活できている。このような人が施設入所者の中にはもっといるので

はないか。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
1．本人への援助
(1) 入所後 10 年、本人の将来のことを考えていた時に、国のグループホーム制度が発足し、そのことが契機となりグループホーム入居を目標とし入居した事例である。
2．環境調整の援助
(1) グループホーム入居者が病気のため「企業就労」ができなくなったが、通所させることで継続している。

事例Ⅲ－4
対象者：女性、42歳、IQ：25　在所年数15年
法人運営施設：
＊　入所施設（すべて 1979 年）（入所更生 100 人、入所更生 100 人、入所更生 50 人、入所授産 50 人）。
＊　グループホームは 6 カ所（1991 年より 1996 年まで毎年 1 カ所設立）。

1．生活歴および生活能力
就学せずに児童通園（10年）、通所更生（2年）、通所授産（9年）を経て、28歳で入所。温厚で他の利用者とのトラブルはほとんどない。身辺処理は細部の確認のみでほとんどできる。日常的な会話はできるが、指示理解力は低い。
2．入所施設内での援助
生活・作業指導：身辺処理、作業指導を実施。33歳で授産棟への実習を行った。
3．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：(1) 入所後 9 年後（37歳）、職場実習。事業主より就労は難しいと言われる。(2) 39歳、実習先を変更して実施。半日、短期で終わる。(3) 41歳、障害者職業センターのワークトレーニング社で職場準備訓練を受ける。作業能力、働く意識、作業の終了報告、挨拶などが身に付いていないため一般就労は難しい、との評価を受ける。しかし本人の真面目な性格から理解のある事業主なら社会生活が可能であるとの評価を受けた。(4) 42歳、老人保健施設での実習。本人の性格にあった仕事であったが、対人サービスの仕事のため本人の判断を求められて答えることが難しく、就労は出来なかった。しかしこれらの活動によって社会生活では大いに成長が見られ、グループホームに移行し通所施設に通うことが決定した。
自活（生活）訓練：記載なし
4．反省／今後の方向
(1) 本利用者の取り組む姿勢や変化を通して、職員の意識の変化が図られさらに他の入所者に対しても社会参加に向ける着眼点を得た。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
1．本人への援助
(1) 職場実習でなんとか、一般就労を目指すが出来ず、結果的にはグループホームから通所施設へ通うこととなった。
2．環境調整の援助
(1) 最終援助目標を地域生活におき、その目標に向かって職員が意識的に統一して援助できたこと。

事例Ⅲ－5
対象者：男性、46歳、IQ：35　在所年数23年
法人運営施設：
＊　入所更生施設 75 人（1973 年）。
＊　グループホーム 1 カ所（1995 年）。

1．生活歴および生活能力
中学卒業後何回か就職するが作業能力の低さのために解雇される。22 歳で家庭より入所。対人関

係、会話は問題ない。清潔感についてひげ剃り、洗濯などの確認が必要。
２．入所施設内での援助
生活・作業指導：過去の就職の経験があり施設内では畑、運搬作業等それなりの能力を発揮する。
指導： 41 才　新聞配達へ。自転車に乗ることを指導。22 歳から 42 歳までの 20 年間については、施設内作業である。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所後19年（41才）、新聞店に勤務していた入所者が他の職場に変わり、その代わりの候補となる。職場まで２ｋｍの農道の通勤手段として自転車にのることを学習をする。２週間職員がついて新聞配達を実施。配達経路を１週間で憶える。

自活（生活）訓練：**入所後21年（43才）**、翌年開所のグループホームに向けて候補の一人として２週間の自活（生活）訓練に参加。さらに買い物指導で小遣い帳をつける指導をする。身辺処理についてはときどき声掛けが必要であるがグループホームの入居は可能と判断。本人の承諾を得て、地域の福祉事務所で保護者との三者面談を行う。保護者は施設を出ることに不安感を持っていたが、施設で責任を持ってバックアップするということで本人、保護者より承諾を得る。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 入所後ほぼ 20 年を園内作業を行い、新聞配達の職を得てグループホームへ移行した。
２．環境調整の援助
(1) グループホーム設立の前年に４名で自活（生活）訓練を実施。グループホームの設立が本人の地域移行を進めたと思われる。

Ⅳ．入所授産施設からグループホームへの移行

事例Ⅳ－１
対象者：女性、23歳、IQ：47　在所年数４年
法人運営施設：
＊　入所授産施設 50 人（1991 年）。
＊　グループホーム２カ所（1996 年、1997 年）。

１．生活歴および生活能力
養護学校卒業後（19 歳）、両親とも不在がちで無関心である、との理由で学校、福祉事務所より入所の依頼がある。身辺処理、会話は支障なく、自分から意志を伝えることがあまりなく、「いや」とはっきりいえない。
２．入所施設内での援助
生活・作業指導：入所後１ヶ月で集団にとけ込む。家庭での食生活が悪く、やせて貧血気味であったため農耕班に入り体力作りを図る。買い物ではお金を全部使いきってしまうため、最初は職員が付き添い買い物指導を行い、後に買い物が出来る入所者が同伴し一緒に買い物をした。最後には単独でできるようになった。自分の意見を言わずに職員を介することが多く意見が通らないと自室にこもったりしていたが、徐々に言えるようになった。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所後約２年で本人の承諾後、ゴルフ場に職場実習にでた。最初の一週間は泣いていたが、慣れてくると仕事が楽しくてならないという状況になり、職場で仲良くなった人と遊びや食事に行くなど活動範囲が広まった。
自活（生活）訓練：特にしていない。入所３年後、就労し、グループホーム入居。
グループホーム入居とその後の経過：同居者に顔見知りがおり、ホームの生活にはなれた。職場への欠勤も自分で電話連絡をとる、単独で通院するなど自分で行動がとれるようになった。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 「入所当初より常に『就労に向けて』を頭におき・・・施設慣れしすぎないように多少冒険

があったが早め早めに就労に向けての基盤作りを行った。」との記述通り、地域移行を押し進めた。

2．環境調整の援助

(1) 「職場の理解が最大の要因であった」との記述があり、ゴルフ場での就労体験が職場の人との交流も含めて地域でやれる大きな自信となったと思われる。

事例Ⅳ－2

対象者：女性、29歳、IQ：75　在所年数5年

法人運営施設：

＊ 入所授産施設50人（1991年）。

＊ グループホーム2カ所（1996年、1997年）。

1．生活歴および生活能力

地域で登録している通所施設にも行かず、生活保護を受けながら母親と二人で生活。24歳で入所する。身辺処理、会話は問題ないが、起床時間が守れないなど生活習慣に問題が見られた。また人間関係でも相手を見下したような言い方をした。

2．入所施設内での援助

生活・作業指導：起床時間等は施設の日課に合わせ徐々に改善される。食後皿をなめる、破れている服を着るなどの行動は改善されるが、自分のやり方で押し通し、相手の意見を聞かない傾向は続き、その都度繰り返し対応する。

3．グループホーム入居に向けての援助

職場実習：入所後3年（27歳）、園内作業の発注先である事業所に一年間実習。出勤時間には間にあい問題がないが、一緒に行く入所者に自分の仕事を押しつけるなどの問題がおこり指導する。入所後4年目、職業訓練センターで8週間の職業訓練を受ける。作業能力そのものには問題はないが、自分の自慢ばかりする、トゲのある物の言い方をする、出来ない人に横柄な態度をとるなど対人関係での指摘がされた。再び、新しい事業所で職場実習。通勤にバスを使用し、遠いために足が痛いと訴えるが、慣れるにつれて実習に行くようになった。このような中で、通勤に間に合うように起床し、服装はよくなり、自分の意見を押し通す態度にも注意されると、「一言多かった」という意識が持てるようになった。入所後5年（29歳）で就労し、グループホームに入居する。

自活（生活）訓練：特になし。

グループホーム入居とその後の経過：グループホームの生活の中でも自分はリーダーだと思い、他の入居者の意見を聞かない態度が見られる。今後、ホームでも職場のようにチームワークが重要であるということを伝えていく必要がある。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件

1．本人への援助・環境調整の援助

(1) 人間関係を中心とした援助（特に自分の意見を押しつけること）が施設内作業、職場実習、グループホームの入居後も続いているが、自分の問題が徐々にわかりつつある。

事例Ⅳ－3

対象者：男性、23歳、IQ：40　在所年数6年

法人運営施設：

＊ 入所授産施設50人（1991年）。

＊ グループホームは5カ所（1994年、1995年2カ所、1996年、1997年）。

1．生活歴および生活能力

17歳、高等部2年より入所。生活習慣は自立。会話は一語で話すことが多い。些細なことで意固地になりその場から動かないことがある。

2．入所施設内での援助

生活・作業指導：農作業を行ったが、最初は持続せず、座り込んでしまい絶えず声掛けの必要があった。徐々に仕事に慣れ、与えられた仕事を最後までやれるようになった。生活面でも起床時間がルーズで、毎日の結果を○×表で本人に評価させ、改善が見られた。

3．グループホーム入居に向けての援助

職場実習：(1) 入居３年後（20歳）２ヶ月の予定で職場実習を行う。昼食時の弁当を作るため早く起きることになったが２ヶ月間寝坊せずに通う。(2) ５年後に自活（生活）訓練をしながら、４人で職場実習を開始。10ヶ月後事業所に採用される。

自活（生活）訓練：入所５年後、グループホーム入居の４名で共同生活をするが、暇さえあればテレビを見、自分の日課がこなせずに、その分を他の人にやらせるということが見られた。話し合いで徐々に解決する。

グループホーム入居とその後の経過：金銭管理の問題等については援助している。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件 **１．本人への援助・環境調整の援助** (1) 施設内で農作業をし仕事を持続してする態度ができ、生活面で起床時間などを注意し、職場実習、生活訓練で自信がつき、就労、グループホームに入居した。

事例Ⅳ－４

対象者：男性、33歳、IQ：59　在所年数11年

法人運営施設：

＊　入所更生施設120人（1973年）。

＊　グループホーム（1994年）。

法人は、他に入所更生施設５カ所（40人,60人,120人,120人,120人）入所授産施設２カ所（120人,50人）、児童入所施設２カ所（60人,40人）を1970年～1973年に設立。グループホームは、法人全体で14カ所（1990年３カ所、1991年３カ所、1992年２カ所、1993年２カ所、1994年１カ所、1995年１カ所、1996年２カ所）。

１．生活歴および生活能力

中学卒業後就職するが、一年後失業。以後親の家にいて 19 歳で施設入所。身辺処理はでき、会話も日常生活に支障がない。協調性に乏しい。

２．入所施設内での援助

生活・作業指導：他の入所者と交流のないことから、木工作業で共同作業を考える。

３．グループホーム入居に向けての援助

職場実習：入所後５年して（23才）、職場実習を開始（自転車ベアリングの締め付け作業）。実習先でも暴言を吐いたりしたが、我慢し他者に配慮することを心がけさせ３年続ける。３年後に給料、就職の可能性を考え、食品製造会社に実習先を変更。さらに３年後、入所後11年してグループホームへの入居が決まり、事業所にその旨を話して正式に雇用される。

自活（生活）訓練：特に記載なし。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件 **１．本人への援助** (1) 園内生活、園外職場実習を通じて終始、対人関係への援助が中心であった。社会生活では人間関係が大事で、一人では生きていけないことを本人が学べるように援助した。 **２．環境調整の援助** (1) 施設は、コロニーと呼ばれる大施設である。１４カ所のホームを持ち、支援センターを独自に展開している。家庭崩壊があり、集団生活が苦手な本人には、小集団のグループホームからの援助が一層期待される。

事例Ⅳ－５

対象者：男性、31歳、IQ：46　在所年数12年

法人運営施設：

＊　入所授産施設 70 人（1978 年）。

＊　グループホーム１カ所（1996 年）。

１．生活歴および生活能力

養護学校卒業後家庭にいて、20 歳で施設入所。身辺自立、会話は問題ないが、対人関係で問題がおこると、口を閉ざし自宅へ帰ってしまうことがある。

２．入所施設内での援助
生活・作業指導：作業での役割、掃除当番などでの役割を一つずつ持つことで自立心が育つように援助する。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所後２年して（22才）、職場実習を開始。他の実習生、職場の人とぶつかり挫折しそうになるが、その都度励ましながら継続。一年間、実習先の施設外の人とふれることで性格に丸みが出てきた。余暇に他の入所者と上手に遊んだり、手助けをすることも見られてきた。その後、金銭管理、余暇の活用、対人関係などの点で評価されてループホームの候補者の一人に選出され、中古自動車販売会社に雇用され洗車作業などを行いつつグループホーム入居（31歳）。
自活（生活）訓練：特に記載なし。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助・環境調整の援助
(1) 数カ所の職場実習で職場の厳しさ、対人関係などを学び自信をつけた。
(2) 職場、職員、家族が一丸となって共通の自立という方向に向けた結果が地域移行となった。
(3) 職場実習年数が 10 年であり、法人の最初のグループホームが設立されることになり、地域への移行が実現したものと思われる。

事例Ⅳ－６

対象者：男性、50歳、IQ：記入なし　在所年数21年
施設：入所授産施設 100 人（1976 年）。
グループホーム５カ所（1990 年、1992 年、1993 年、1996 年）。
他に入所更生施設 100 人（1975 年）、児童入所施設 50 人（1977 年）、入所更生施設 50 人（1985 年）。

１．生活歴および生活能力
就学猶予のまま農業の手伝いなどをして母親と暮らす。兄も知的障害。20 歳から６年半入所。その後、左官屋に約二年住み込みで働くがこの間煙草中毒となる。29 歳で現在の施設に入所。当時は、着脱などはできるが落ち着きがなく女児に対する性的ないたずらで地域の問題となった。
２．入所施設内での援助
生活・作業指導：最初の６年（35歳まで）は農耕班に所属。煙草は一日の本数を決めることで特に問題とはならない。食事当番、体育会の練習、ゲーム、ソフトボールなどの時に社会的な活動には事情がわからず喧嘩をすることが多かった。これらはこれまでの生活経験が乏しかったために起こったもので一つ一つ経験することで改善されていった。施設での生活の安定が徐々に本人の情緒の安定につながっていった。
３．グループホーム入居に向けての援助
職場実習：入所後15年して（45才）、トラック輸送会社へ２週間の予定で職場実習を開始。その後、７時15分に出勤し６時15分に帰宅するスケジュールで５ヶ月間実習をする。
自活（生活）訓練：50歳（入所20年後）９ヶ月後に開設予定のグループホーム候補者の一人となり、候補者全員（４人）で職員宿舎で自活（生活）訓練を開始。自活（生活）訓練では、(1) 食事、入浴、清掃、洗濯の生活技術の獲得　(2)服薬と歯磨き　(3) 自分で出来ないことを他の人に伝えて手伝ってもらうを課題とした。

グループホーム移行に寄与したと思われる条件
１．本人への援助
(1) 対人的な問題への対応が長期の施設生活で、作業指導、職員との話し合い、クラブ活動、職場実習等の様々な経験を通して解決された。
２．環境調整の援助
(1) 本人の施設前の貧しい家庭環境と比較して、入所施設での生活は安定していた。さらに、グループホームへと移行できた。